
デッドライン

汀空人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デッドライン

【Nコード】

N6611B

【作者名】

汀空人

【あらすじ】

世間を揺るがしたのは一年前に起きた、奇咲研究所大量虐殺事件。全ての人が残り残らず喰われたという。そんな中ひよこりと現れた色素の薄い青色の髪を持った少年。寿命が尽きるまでわずかな時間しかない少女。全てを諦め絶望した中学生娘。終わりへの扉は開かれた。 さあ、全てを終わりにしよう。

零日目（前書き）

このお話はどこか血なまぐさい臭いを漂わせた中で切ない香りと、肩を竦めて笑ってしまふような場面等様々あります。このお話をどう読んで楽しむかは読み手のあなた次第です。どうか、最後まで私とともに付き合っていただけだと嬉しいです。それでは、終わりへの一步を歩むための世界へと行ってらっしゃいませ。

目次

全ての終わりから、はじまりの一瞬のおはなし。

鉄の、鼻にまとわり付く嫌なにおい。その臭いは家中に充満し鼻が利かなくなってしまうといっても過言ではなかった。床には澄み渡るような湖。けれど、そこに白鳥が白いまま浮かぶ事はありません。きつと真っ赤に染まってしまうことだろう。だって、私の目の前にあるのはついさっきまで楽しく食卓を囲んでた家族の血なんだから。ふらり、と覚束ない足取りで湖の中を素足で進む。もちろん、綺麗な赤色に染まって。怖いわけじゃないけど怖いのもかもしれない。本能で生きる事は生涯ないことだと思っていたのに、理性を保って自分を貫き通す事を誓ったのに。今、私は、本能に従って、脳から来る直接の命令で、反射で動いてしまっていた。何時もなら軽やかにあがる階段を、脚の触感で物凄く感じてしまう。ぺたり、ぺたりと。足跡は黒ずんだ。もしくは暗かったからかもしれない。どちらにしろソレは黒かったのだから変えようはない真実なんだから。出来る限りの冷たい視線でそれらを見つめてから、目の前の扉を全体重をかけるように思い切り且つ軽く開けた。自分の、部屋だった。よく考えれば私の部屋は三階の屋根裏部屋。本来なら十二段しかない階段を二十四段も上っていた。気が動転してたので数えてはいなかったけど。扉をなるべく音がならないようにそっと閉めて外へと繋がる等身大の窓へと近づいた。

月は綺麗だった。でも、その輝きが今は怖かった。

この時間なんてすぎてしまえばいいのに。あんな、汚らしい劣等

感を抱いてしまうような人間に何て殺されたくない。そんなの、無様すぎる。私の死に方はもつと素敵じゃなくちゃ、ね。私の怖さは所詮そんなものだった。死なんて別に怖くない。殺され方には拘らなくちゃ。自殺だ何て見つとも無くて生まれ変わりたくもなくなるし。そんな場違いなことを考えながら奇妙な月の輝きを見つめていた。

これから、何かが変われば面白いのにか思ったりする場合。必然と、面白い事は起きてしまうのである。その面白い事が人によっては様々なだけで。誰にでも、面白い事なんて起きてしまってるのだ。本人にとって面白くないだけで。けれど人はそれを面白くないと否定するが、傍観者からすればさぞ面白き事で。用は他人なんてどうでも良い世界へとなした今、面白くないことは絶対的に起きない。そしてこれから起きる少し不可思議な、世間を揺るがす殺人鬼^{ひつくい}とか、命が付きかけてる少女とか、全てに無関心な脱力系現役中学生娘とか、全ては終わりへと繋げるための序章にすぎない。これはデッドラインなのだ。

ゆっくりと始まりの鐘はなりはじめている。歯車は徐々に動き始めた。

一日目

某所、裁判の判決が下った。判決は『死刑』。それも、死刑執行猶予があるわけではなく、この裁判が終り次第直後に行われるのである。ただし、判決が下った今でも、下された少年とも言える青年は薄く、口元だけで笑っていた。全てに勝ち誇り、何をどう動かしても動じようがないような、そんな余裕のある笑みであった。ただ、青年には異端があった。姿かたちは全て人間と同じなのに、髪の色だけが色素の薄い青色で、染めたわけではなく地毛というに等しいほど純粋な青。さて、ここで青年が犯してしまった罪について簡単に説明しておこう。

今日から遡り、三日ほど前に起きた世間を揺るがした大量虐殺事件。事件が起きたのは奇咲研究所。この研究所は公にはなっておらず、極秘で研究を行っていた。それは新たな人種開発。幾度も幾度も失敗を重ね、成功する事は不可能かと思われていた矢先に最後の希望として作られていた実験体「0」。通称、零^{ぜろ}。珍しく青色の、色素の薄い髪で瞳も同じく透き通るような水色だった。肌は血が通っていないせいか、青白い肌を持ち主。何にせよ生きてる訳ではないが。そんな零は研究の材料で実験体の一つであり、されるがままに試され続けた。もちろん、その時点で自意識は持っていないかった。その分良かったのかもしれない。そして、ある日。一人の若かりしき女性の研究員が誤り研究中の薬品を零の皮膚に零してしまった。それが、運の付きであった。その直後にはなにも変化はせず、女性研究員は慌ててその場を去り、無かったことにしようとしていたのだ。夜中の二時ごろ、未だに研究中で居残りしていた研究員がたった一人で零の居る研究室にとどまっていた。背後でほんの少し布ずれの音がした。「交代か？」と安堵の気持ちも踏まえて後ろを振り返る。そこから、全てを地獄へと導いたのだった。研究員の腹部

にはたった一瞬で、大きな半径十センチほどの穴が開いたのだ。当然の如く血は噴水のようにあふれ出て、その場にはしゃり、と音を立てて崩れる。死に切れないまま、死の恐怖をじわじわと味わいながら死の淵をなぞって行くのである。こんな苦しい死に方なんて無いと、思っていたが、今、体験しているのは間違いなく自分自身だった。自分の血にまみれながら研究員は、静かに命の花を閉じた。それを、黙って見つめていたのは、色素の薄い青色の髪を持つ青年、否、実験体『零』だった。人が死にゆく様をやけに愉快そうに見つめているのだ。満足したように口元を歪めて、空腹を満たした子供のような顔で一瞥していた。

「あは、はは。一人目。俺がこの手で殺しせた初の人だ。記念しなきゃな。カメラ持つてる人ー居るー？居ないか。ま、自分の目に焼き付けとけばいい。ごちそうさまでした。」

手に付いた血をぺろりと舐める。研究員の腹の穴を開けたのは間違う事は無い、零自身の手であった。まずい、と呟けばそのまま血の味しかしない手を舐めながらどこかに続いている道をひたひたと進んでいく。次のターゲット探しに、目指すは全員抹殺。零は暗闇の中、本当に嬉しそうに嬉しそうに笑った。

翌日、奇咲研究所にいた、約一万人の研究員等がたった一夜で屍と化した。それを行ったのはたった一人の青年で。それぞれの殺され方はあまりにも無残であり、人間が出来ないような、殺し方を、死に方を作り上げたのだ。少し変だが芸術家と評価される場合も無くは無いが、そう評価するのは相当精神が崩壊した奴ぐらいだろう。そんな、奇妙で奇怪な事件の加害者が、死刑を下された張本人、零なのだ。

今回の、零の死刑内容は絞首刑であった。あまりにも稚拙な作りであり、古典的なものである。深い穴があげられてあって、その上

にすぐ引き抜けるような軽めの板を乗せ、板の上に立たせた人の首に長めの縄をかけるのだ。そして、板を引き抜けば首を吊られて窒息死というわけだ。案外、一瞬で死ぬるので、自殺で首を絞めるよりも苦しくはないが、米国と比べるとやはり日本の技術は古い。というか遅れてる。米国では麻酔をかけてから、その後別の薬を注入し、眠るように死んでいくという。殺される方はこっち方が楽かもしれないが、罪を犯したのものにはそれ相応の苦しみを味わって欲しいというのが被害者やらの願いだったりもする。そんな訳で絞首刑だが、これから起こるあまりにも現実離れた事により、よりいっそう世間を騒がさせる事になったのであった。

そして、零の首にも縄がかけられ、徐々に死刑の準備はなされていく。ただ、零自身は恐れもしないでじつとどまり、死ぬ事を恐れないのか、無関心なのか、それとも別の何かか、不気味な笑いを浮かべていたという。滑稽、そう胸中でせせら笑う零は背後でざわつきを感じた。死刑執行のときが来た。やはり、板をひく奴は相当嫌そうな顔をしている。そりや後味わるいもんなあ。でも、安心するべきだ、と余裕綽々の顔で相手を見下ろす。なんといったって、俺は。瞬間、がくと体が下がった。当然の反応で一瞬だけ動揺するが、理解する。やっと、死刑が執行された。周りの者たちの雰囲気は実に曖昧なものであり、見てて愉快的な気もしたが。ただ、一人の、板をぬいた者が違和感を感じ取ったのだ。穴の奥で密かに息の音が聞こえる。それも、苦しそうな呼吸ではなく、健康な体を持った元気活発な普通の、心臓と同じようにテンポ良く聞こえてきた。その者を初めとし、周りのもの全ては恐怖を覚えた。黒板を爪で引っかくような、背筋を虫が這うような、そんな悪寒だった。一人が穴を覗けば、吊るされた死体がひとつ。それしかないのに、やはり、気のせいか。そう思い安堵の溜息をつこうとした時だった。ぐるんと。吊るされて死んだはずの、頭が勢い良く上を向いた。それは、

高らかに笑つ。

「ぎゃはははははつ。ねえ、そこのお兄さん。これ、けっこー不愉快なんすけど。早く外してくんないかなー。」

あまりにも陽気な声で青年は声をあげる。その声は死んだはずの零からでていたのだ。間違はなく。口は動いて、心臓の音はして、手足は蠢いていた。そして、その綺麗な水色の瞳が捉えてるものは映っていたのは、自分なのだ。こいつは、生きてる。死んで、居ないはずなのに、死んでいない？可笑しい可笑しい可笑しい。怖さのあまり、その者も悲鳴をあげて、誤まつてか、わざとか、その吊るしてた縄を断ち切った。ぶちり。零は穴の中へと落ちていった。次こそは確実に、生きていたとしてもこの長い穴を這い上がることは不可能であろう。今度こそ本当に安堵の溜息を吐いた。ざわつきが始まり、終る。そうだ、死体を回収しなければ。けれど、生きていた場合も考え、油を穴から注ぎ、火をつけたマッチを落とす。火は勢い良く燃えていた。第二の死刑みたいで、けれど不思議と嫌な気はしなかった。燃え盛る火は青いように見えて、それはそれは美しく見えた炎だった。やがて、炎が燃え尽き穴の中は煤やらで真っ黒になっていた。死刑囚といえど死体は回収して供養をしなければならぬ。骨を、回収しないと。数人が穴にロープを垂らし、降りていく。そこは長く、暗く、おぞましい世界だった。やっとの思いでついた底には、その数人を呆気させたものだろう。脱力感も苛まれた。そこには大きな大きな洞窟のような穴が開いていたのだ。確かに、ここはコンクリートで固められた場所であり、またもや不可能なおきたのであった。その洞窟は外に繋がっていて、零は再び世界に離された。

ここから、本当の終わりのための話が徐々に始まるうとしていることはたった一人の少女しか知らなかったというのも誰も知らない。

二日目

外は気分爽快だった。心地よい風と、開放感のせいだろう。特に急ぐ事も無く1歩1歩を確実に進んでいく。辺りを見回せば建物ばかり。けれど、人通りは無い。そう、ここは住宅地なのだ。丁度、今は夕飯時であろう。家々には一つ部屋に集中して電気が灯っていて、家族の談笑が聞こえてくる。逃亡してから、一年経った。順調に人を殺し続け、腹を満たした。警察からは上手く避け、未だに捕まってはいいない。捕まったとしてもすぐ逃げられるのだが。まるでいたちごっこみたいで面白おかしく、なりそう。次はどうやって欺いてやるのかなどと考えていたら一年もたったなんて馬鹿みたいだぞくり。一瞬にして血が騒いだ。気持ち悪いぐらい興奮しそうだったのを理性を保ち堪えた。伏せていた顔を上げればただの、一軒家。他のと違うのは二つ。電気が一つも灯ってない事と、血を騒がせるような同類の臭いだった。漂うのは血、の臭い。それも人間のものである。にたり、と零は笑えばさぞかし楽しそうにして。

「これは、久々に喰ってやらなきゃ、俺の性格が許さないだろ。」

そう呟けば、家全体を見る。周りに比べれば一回り大きく感じるのは、屋根裏部屋があることだろうか。屋根裏部屋には人がそのままでの姿勢で通れるような大きい出窓がある。侵入するとしたら、あそこだろ。そう胸中でせせら笑う。体の全体重を、重力を足に向けて一瞬にして上へとむける。軽く、飛躍したのだ。人間ならありえないことだが、人外なのでもう言うまい。二階の屋根に着地すれば一息ついて、もう一回だけ飛躍する。そうすれば、屋根裏部屋の出窓に移れるのだ。こんな面倒なことをせずとも正面堂々入ったところで別に問題は無いが、少しスリルというか快感を味わいたいのので、回りくどい事をわざとやるという。そして零は窓越しに着地。顔は

下を向いたまま。気配は感じない、感じなかったのに。零が顔を上げた瞬間。はじめて、恐ろしいという感情を持ち合わせた。ぞくりとしたのだ。別にそれ自身がホラーみたくグロテスクであろうことならば、喜ぶことだろう。恐れを、なしてしまった。目の前にあったのは、たった一人の少女。それだけだというのに何故か怯えてしまう。今現在、まだ呼吸も出来ない。啞然として少女を見ただけで、少女も冷めた目で零を見るだけだった。驚きもせず、嘆きもせず、嘲笑もせず、恐れもせず、少女はただ、ただ冷めていた。そんな中で自分に恥じた。今まで誰に対しても抱いた事の無いものを、ただの直感で、見ただけで瞬間的に脳裏に蘇ったのだ。美しい。整った顔立ちにすらりとした指先。肌は血が通っていないような白、亜麻色の柔らかい髪。そして、見るもの全てを見透かし、吸い込みそうな純粹な、真つ黒な瞳。こういうのを、美人というのかは判らないが、自分が意識を持つて初めて美しいと思ったのは、今現在目の前に居る女性だった。それは、変わらない事実。そんな彼女に心惹きつけられていれば彼女は薄く笑った。月の光の所為で美しいと奇怪さが足して二で割ったような笑みだった。

「私はあなたを知ってる。だって学校じゃ物凄く有名よ？一年経った今だから音沙汰無いし、あんまり話題にはされてないけど。みんな心の隅に貴方が起こした事件を知ってる。何？その驚いたような顔。もしかしたら驚いてないのかもしれないけど私にはそう見える。だって水色の髪を持った人なんてテレビで報道されてたんだし、わざわざ染める人なんてただの馬鹿だし、それに、何かあなたはきつと、何かが違う。」

話を多少進められ混乱はするが、理解はした。相手は自分を知ってるが自分は相手を知らない。何で。不愉快極まりないことだろう。このまま、殺してやるのか。こちらら腹が減ってるんでしてね、お食事したいんだけど、今日のメインディッシュは貴方様ですか？殺

意満々の瞳で相手を見ていれば特に何もなさそうな表情で懇願するように、手を合わせて零に頼見事を、と。けれどそれは決して命乞いではなかったのだ。

「実は今ちよつと私にとつて気に障る事が起きてるの。もう体中に蟲が蠢いてるみたいに歯痒い。これつてあんまり耐えられない、から。私からのお願い聞いて。今、その、貴方の手で私を綺麗に殺して欲しいの。」

その発言はまだ十代の少女にしてはあまりにも悲しすぎるものだった。だが、零自身そんなことなど全く思いもしないが少し戸惑った。自分は殺す事に快楽を求めてた。相手が死ぬ間に泣き叫ぶのがとても快感で仕方なかった。それ故に殺し続けた。自分の欲望を抑えるために。まるで食事を貪るかのように殺人を行う。食欲は殺欲。食べ物はいらぬ。殺すための人が欲しかった。しかし今の発言は自分にとつて多に困惑させることだった。あまり、面白くないのだ。このまま殺しても何をしてもきつと、満足などしないだろう。残るのは胃がもたれるみたいな不快感だけで。すると、下の階の方で物音がした。家族のものだろうか。その音に敏感に反応してしまえば、彼女はそれを鋭く察知し、何気なく解説する。

「今、私の家には人が居るの。でもね、知り合いでも友達でも家族でもなければ恋人でもない、みずしらずの人。勝手に入ってきたと思っいたらいきなり、お母さんの頭を鈍器で殴って割った。お母さんは起きなかつたし、喋らなかつた。目は飛び出たけど。お父さんは首と体が繋がってたのに、切断されてた。それがね、物凄く雑な切り口なの。多分台所の包丁かな。相当苦労しただろうね。お父さんも痛かつたのかな、楽にきつてあげれば良かったのにな？最後まで切れなきや死ねないんだもの。お兄ちゃんは溶けてた。理科の実験の時勉強したのに忘れちゃったけど何かの薬品をかけられたんだ

と思う。眼球と頭蓋骨ちよつとだけ残つて後は消えてた。何でお兄ちゃんつてわかるかつて？だつて、家族間もの。当然でしょ？そしてそれらをしたのみずしらずの人。今、家中を探つて私を求めてるんだと思う。でも正直あんな気の狂つた人に殺されたくないって思わない？普通。だから、あなたに殺して欲しい。」

理由が理由になりきれないが、彼女は死にたくないわけではないが殺されたくはないと。みずしらずの人には。何とも難解且つ考えにくい問題だ。答は返つてくると思わない方が正しいと今は見なされるであらう。　びちゃ、びちゃ、びちゃ。水つぽい足音が階段を上つてくる足音が聞こえる。きつと屋根裏部屋へ向かう階段だろ。とうとう嗅ぎ付けたのかと、彼女は悔しそうにドアの方を睨んで零を再び見る。眼差しは先ほどと変わらない意思を持っていた。　びちゃ、びちゃ、び、ちゃん。足音が止まり足を揃えた様で、その音はもうドアのすぐ目の前にあるよう。零も彼女も特に反応はしなかった。直後にきいい、と軋む音を響かせながらドアは開く。そこに存在したのは体中血まみれで無精ひげの生えた、けれど若そうな二十代後半の男性だった。精神は相当前に逝つてしまつただろうけれど。そして気味悪く地の底から笑いあげるような声を発しながらゆらりと彼女に近づく。手に持つてるのは縄。絞首、か。自分と同じ死刑方法ではないか、思いながら楽しもうと思つたが、訳もわからず反射神経で体が動き、腰を、あげて、男性に向かい切っ先を向ける。自分自身の手の爪だった。爪は男性の腹を抉るように穴を開けた。腸とかその他もろもろが溢れ出てきて、優悦感たつぷりの笑みで見下ろされながら一瞬にして気の狂つた男性は動く事をやめた。零はふわりと振り替える。先程と変わらない表情でただ、見つめていた。見ず知らずの人を殺した零と、家族を殺した見ず知らずの人をただじつと。

「なあ、糸も簡単にこんなヤツ死んじやつたけど、あんたはどうす

んの？家族を殺された恨みとか言うんかな。よくわかんないけどさ、そういうのって警察に届けたりするんだろ。まあ死んじまつたし事件は解決したけどな。この状況から逃げる術は何て聞いたら、俺に殺されたいとか言うんだろ？なんなら、自殺しちまえ。」

自殺という言葉に嫌そうに顔を歪めて零を睨む。自殺が嫌なのか。どうしても、他殺でそれ且つ俺に殺されたい？その、理由がわからない。すると彼女はぺたりぺたりと近づき目の前にまで居た。少し体を反る。一応『美人』というものに値してしまっているから、緊張というものがあるのだろうか。彼女の赤く薄い唇はそつと口を開けた。

「さっきのお願い事なんてどうでもいいから、改正。どうせあなたは私の知らないところを歩んでいくんでしょ？自由に且つ何かを目指して進むんでしょ？なら、少しぐらい邪魔が居たって構わないよね。ね、私をあなたと一緒に連れてって。保存食としてもいい。お腹がすいたら私を食べてしまえばいい。欲求不満になったら私を殺せばいい。だけど・・・私にも条件を頂戴。要らなくなったら置いてっていいけど、置いてく時には私を殺してから行って。事故とか無様な死に方したく、なくって。」

不思議と自分の口元も歪んでいた。面白い。受けてたつてやる。同意の意で右手を差し出す。彼女は暫くきよとんとしてから、理解したのかきつと最高の笑顔で相手の手に自分の手を添える。何故だか判らないが笑顔から目が離せなかった。よく、わからない、けれど。自分の事さえも理解できていないのに、人のことなんてもつと理解出来ないと思っていた。だから今はまだ理解はしないであろう、奇妙な感情に。

「私は、粹^{すい}。苗字は、要らないでしょ？」

「は、ご自由に。俺は 零だ。」

零が導き、粹はそれに従い窓から外へと向かう。二人はやっと広い世界へと逃げる事ができたのだ。鳥籠から放たれた生まれかばりの小鳥のように。けれど、一匹の命はもうすぐ尽きようとしていた。それは、逃げようの無い事実だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6611b/>

デッドライン

2010年10月10日02時39分発行